

61 クモ膜嚢胞に合併した頭蓋内血腫の3例

工藤香名江・鈴木 直也*

弘前大学脳神経外科

青森労災病院脳神経外科*

【はじめに】クモ膜嚢胞小児例の頭部外傷後の頭蓋内血腫の自験3例に考察を加えて報告する。

〔症例1〕14歳男子。左中頭蓋窩クモ膜嚢胞（以下ACと略）があり、頭部外傷後にACの縮小と慢性硬膜下血腫（以下CSHと略）を認めた。

〔症例2〕11歳女子。外傷一ヶ月後ACと左CSHを認め、開頭によるCSH洗浄とAC被膜開放と嚢胞内中隔の除去を行った。

〔症例3〕13歳男子。頭部外傷後AC内血腫とCSHを認めた。穿頭洗浄血腫除去術、後日開頭によるクモ膜嚢胞被膜開放と嚢胞内中隔の除去を行った。クモ膜嚢胞内で中隔付着線に沿った軟膜出血の痕跡を認めた。

【結果および考察】3例ともCSHを合併していた。1例は穿頭術で治癒、嚢胞内に血腫を認める2例は、嚢胞内の中隔付着部の出血が関与する可能性が考えられた。

【結論】無症候性クモ膜嚢胞でも外傷を契機に頭蓋内血腫の合併症を生じることがある。嚢胞内部の中隔付着部が外傷時の出血源となる可能性がある。

62 難治性慢性硬膜下血腫の1例

藤田 隆史・荒木 忍・川上 雅久

太田西ノ内病院脳神経外科

症例は77才、男性、じん肺で内服治療を受けていたが、血液凝固系の異常や、明らかな外傷の既往はなかった。歩行障害で発症した右慢性硬膜下血腫に対し穿頭洗浄術を施行、症状は改善し一旦退院したが、その約2週間後に意識障害を来し再入院、今度は左慢性硬膜下血腫の増大を認め穿頭洗浄術を施行した。その後、左側血腫が約1か月の間隔で2度の再増大を来し、症状を呈したため各々に手術を行った。再手術では血腫腔への炭酸ガス注入も試みたが、血腫はさらに増大傾向を示した。そこで血管内治療も考慮に入れ左中硬膜動

脈造影を行ったところ、血腫部位に一致した異常血管網を認めたため塞栓術を施行した。塞栓術後は血腫の再増大は認められず、神経脱落症状を残さず退院した。

再発を繰り返し治療に難渋するような慢性硬膜下血腫症例において、異常血管網の塞栓術は考慮しても良い治療法と考えられた。

63 慢性硬膜下血腫術後再発に対するトラネキサム酸の治療効果

滝上 真良・野村 達史・内藤雄一郎

相馬 勤

市立札幌病院脳神経外科

【目的】慢性硬膜下血腫（CSH）では局所線溶系が亢進しているが、意外にも抗プラスミン剤であるトラネキサム酸（TA）の治療効果を検討した報告はみあたらない。今回、TAによるCSH術後再発阻止効果につき検討した。

【対象・方法】対象は、症候性CSHに穿頭血腫洗浄術を行った98例で、2001年以前のTA非投与群47例と、2002年以降の投与群51例の2群に分け、抗血小板・凝固療法、透析、肝硬変等の凝固線溶系異常の患者は除外した。術後1～4週毎にCTを施行し、血腫の再増大、高吸収域化をもって再発とし、投与群ではTAを750～1500mg/day投与し、非投与群では症候性となったら再手術を施行した。

【結果】非投与群では47例中8例（17%）に再手術が行われた。一方、投与群では51例中14例（27.5%）にTAを投与し全例改善し手術を要した例はなかった。

【結論】TAはCSH術後再発阻止に有効であった。

64 慢性硬膜下血腫に合併した急性辺縁系脳炎の1例

長谷川 亨・山本 潔

新潟県立小出病院脳神経外科

症例は46歳の男性で脳振盪の約3ヵ月後に両